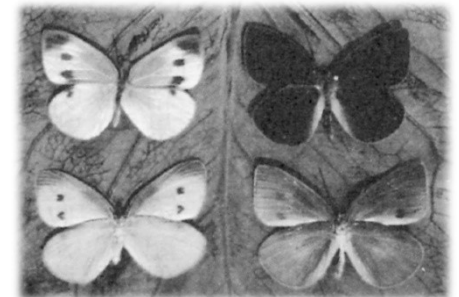


本当に身近な、誰でも知っているチョウといえばアゲハチョウとモンシロチョウだろう。これまで、つい専門的な話に踏み込んだりしているが、一貫して「チョウの世界の不思議」を伝えたいという気持ちで記述している。引き続き、モンシロチョウやアゲハチョウのようなごく普通種にも意外に知られていない多くの不思議があることを紹介していきたい。

モンシロチョウの幼虫がキャベツやダイコンなどを食害することは誰もが知っているが、実は、古い時代に日本へと侵入してきた外来種であることはあまり知られていない。本来は山地性でイヌガラシなどの野生植物を食べていたのが、人間による栽培野菜に順応して分布を広げ北海道から南西諸島全域で見られるようになってきている。人間の目では♀は翅表の黒い鱗粉が濃くて白っぽい♂と容易に区別できるが、モンシロチョウ自身は紫外線が見えていて、紫外線をよく反射する♀は♂には明るく光って見え、逆に紫外線をよく吸収する♂は♀側からは黒く（正確には補色の青緑色に）みえているという。紫外線透過フィルター使用で撮影された写真の右が♂で上が翅表、下が裏面である（参照 1）。色覚に関する研究では紫>黄>青>赤の順に反応が見られ、赤色にはほとんど反応しなかったという。赤い花にくる場合も花の芯部分が黄色であるとか、赤い色に惹かれての結果ではないと説明されている（参照 2）。



モンシロチョウ♂の習性で面白いのは他の種に対する強い排他性で、キャベツ畑などで近縁のスジグロシロチョウがモンシロチョウの群れのなかに入り込むと、気づいたモンシロチョウがすぐに追い払おうと迫り、たちまち多数の♂がいつせいに加勢して群れをなした追跡飛翔が展開され、畑の外に追い出すのだ。個体密度が高まると雌雄ともに群れをなして移動するという習性もあり、鹿児島、三重、千葉、秋田などで記録されている（参照 2）。岡本綺堂による『半七捕物帳』に「蝶合戦」という 1 篇（注）があって、万延元年（1860）6 月の末、江戸の本所に白い蝶が何万匹も群がって飛ぶという話がでてくるが、まったくのフィクションではなく、実際の数はオーバーに表現されているだろうが昔からこのような事象の観察例が知られている。

筆者は中学時代にモンシロチョウの羽にマジックで赤や紫などの色をつけて飛ばし、一度危険な目にあっても遠くへ飛び去っても再び同じ所に戻ってくるという習性を確認したことがあるが、より専門的な研究では♂において定着性が高く、発生地で羽化する♀との交尾確率を高くするためだと結論づけている。筆者のマジック彩色実験では「すごくきれいな珍しいチョウを見たよ」と何も知らない母を驚かせてしまったという愉快的エピソードがあって、実際のときの菜の花畑は色とりどりのモンシロチョウが飛び交ってとてもきれいで、クモマツマキチョウが飛ぶ光景も想像できた。

ところで、モンシロチョウにかぎらず、♂に交尾を迫られた♀がお尻を高くそり上げるしぐさを目にするが、「ハイ、どうぞ」という OK のサインだと思うと大きな間違いで、チョウの♀は多くが貞節で二度以上の交尾を拒否するといわれ、その際、上記のような挙動をみせる。この体勢をとられるといくら頑張っても交尾はできず、♂はしづしづ退散となる。

通常、キャベツやハナキャベツで育った幼虫はその葉裏などで緑色蛹となるが、越冬する場合、食草から離れてスズメなどに見つからないような場所でうすい褐色の蛹となる。いずれの

場合も蛹の付着背景にあわせた保護色を実現しているわけで、どういうからくりで蛹の色を決めているのか、アゲハチョウの項ですごい研究例を紹介する。

参照 1：小原嘉明著「モンシロチョウ」（中公新書、1689、p.39）← 一読の価値あり

参照 2：福田晴夫他著原色日本蝶類生態図鑑（I）（保育社、1982、p.185）

注）http://www.aozora.gr.jp/cards/000082/files/1021_14998.html